絵本フォーラム

2019年9月10日　第126号
発行所　NPO法人「絵本で子育て」センター
所在　〒659-0067　芦屋市東芦之町2-21-405
TEL 0797-38-7516 FAX 0797-38-7939
https://www.ehondekosodate.com/　E-mail info@ehondekosodate.com
郵便振替口座 00900-6-191567
©NPO法人「絵本で子育て」センター 2019

絵本を読み継ぐ

吉澤 志津江（絵本講師）

町内の保育士や幼稚園教諭を対象に絵本の話をする機会があった。子どものエネルギーを受け止める力のある絵本を、子どもにかかわる専門家として子どもに読んでほしいと思った。

＊　＊　＊

眠られた時間のなかで、「スモールさんは おとうさん」（福音館書店）との出あいをあげる。（福音館書店）「ぐんちゃんのはじめてのがっこう」「ペンギン社会」など、スタンダードな絵本ばかり紹介した。ここ（ここ）ですか？」子どもの頃に読んでもらったことがありますよね」と呼びかけても、反応が薄い。「スモールさんはおとうさん」にいたっては ほぼ皆無。世代間ギャップばかりは言えない空気に困惑しながら話を進めた。

そういえば少し前に、学校司書の方から、「子どもたちは、家庭や保育園でスタンダードな絵本を、楽しんでいない」と聞いていたので、会場の芦屋市に、「ぐんちゃんのはじめてのがっこう」「ペンギン社会」など、スタンダードな絵本ばかり紹介した。ここ（ここ）ですか？」子どもの頃に読んでもらったことがありますよね」と呼びかけても、反応が薄い。「スモールさんはおとうさん」にいたっては ほぼ皆無。世代間ギャップばかりは言えない空気に困惑しながら話を進めた。

そういえば少し前に、学校司書の方から、「子どもたちは、家庭や保育園でスタンダードな絵本を、楽しんでいない」と聞いていたので、会場の芦屋市に、

＊　＊　＊

研修のあとの感想は、「古くからある本は、退屈だろう」と思ってなるべく新しい本を選んでいた」「棚にある絵本を適当に選んで読んでいた」「子どもの反応がほしくて声色を使っていた」読んだ後、いつも子どもから感想を聞き出していた」「普段のことがとても参考になった」「読きを聞きたい」との感想もいただいた。子どもと接する方たちに、私たちができることが、まだたくさんある。

保育や幼児教育の現場の方たちに、絵本の素晴らしさを読み方選び方が、思いのほか伝わっていない現実を目の当たりにした。現場の大人を、絵本の豊かな世界に引き込んでいく力を、もっともっと、できればたくさんの方に届けたい。

＊　＊　＊

年間出版される絵本は約1000点。その中からいい絵本を選ぶのは至難の業だ。作家や出版社で選ぶ方法もあるが、それよりは、いつものこと子どもに教えてもらいましょうという話をした。

それはもちろん、今、目の前の子どもに聞くということではない。読み継がれた絵本は、これまでの子ども達の、数えきれない「読んで！」「読んで！」の声。その絵本の力と、それを受け止める子どもの力を信じたい。

ライバンにとんどん投げ込んでゆく。こうして、3人3様のおいしいトマトのトウモロコシ料理のできあがり。3人組はみごとに男前になる、というおはなし。

テンポよく歯切れよいテキストにパワフルな絵づくりが目を奪い、ナンセンスなひびきが感じるセンスのよさ。そこで生きぬくことの大切さを語っていないか、尊さを感じさせないか、と。とてもシンプルで素朴な絵本であるけれど、ゆきつもどりつ読み込むにつれて、ぼくは想う。作者の意図はどうであれ、生きることのすばらしさをこの物語は語っているのではないかと。生き物の生は一回きである。生の誕生は死への旅立ちだ。その旅をどのように生きるか。それぞれが、持てる力の限りをつくして生きぬくことの大切さを語っていないか、尊さを感じさせないか、と。

ぼくは深読みしている。

（おびか・たえす）

『絵本で子育て』がスタート

青木　絵美子（北海道）

来は絵本が大好きな子に育って欲しいなーと思いながら、色々な絵本を手にとっては一緒に読むことを想像し、ワクワクしながらその時間を楽しんでいました。それと同時に、胎教としても絵本の読み聞かせをと思いながらも、娘へ読み聞かせを行うようになり、気がゆったりと流れていくようで、心身共にリラックスでき、とても良い思い出となりました。

娘が産まれてからは、毎日が慌ただしく、憧れない子育てに不安を感じる時もありますが、母親となった今、念願だった娘に読み聞かせをする時間が1番の楽しみになっています。まだ"絵本で子育て"ですが、親子で子育てが スタートしたばかりの『絵本で子育て』がスタートしました。

私は幼い頃から絵本が好きで、母に読み聞かせをしてもらったその時間は、今でも大切な思い出となっています。大人になっても、絵本から遠ざかっていましたが、地域で読み聞かせを行う機会があり、その中でお子さんが楽しそうに絵本を見て、真剣に読み聞かせを聞いてくれる姿に、絵本ってこんな力があるんだ！と、改めて絵本の魅力に気づき、私も再び様々な絵本を読むようになりました。

そんな私もつい先日、娘スタートしたばかりの『絵本で子育て』がスタートしました。

時間を楽しんでいました。お腹に手を当てながら娘へ読み聞かせを行うようになり、心身共にリラックスでき、とても良い思い出となりました。

娘が産まれてからは、毎日が慌ただしく、憧れない子育てに不安を感じる時もありますが、母親となった今、念願だった娘に読み聞かせをする時間が1番の楽しみになっています。まだ"絵本で子育て"ですが、親子で子育てが スタートしたばかりの『絵本で子育て』がスタートしました。

絵本を通して想像の世界はぐーっと広がっているようです。でも誰もその世界を目で見ることはできません。子どもたちの想像の世界を見守り、大切にしていきたいと思います。

（あおき・えみこ）

ブックスタートによせて

小曳　昌子（京都府）

ブックスタートに携わり10年が過ぎました。我が子の子育て中は無我夢中で気づけなかった事が沢山あります。

一歳前の子どもたちが「いないいないばあ」の絵本に身体中で感情を表現する様子を見ると読み聞かせをしている私も嬉しくなります。お母さんに抱っこされ、その膝の上で足をバタバタさせて喜んでくれるのです。

「ばあ」のことばに、一生懸命絵を見ている子どもさんや、絵本に興味しんしんで近寄ってきてくれる子どもさんなど反応は様々です。みんな違ってみんないいということを実感しています。

くっきりはっきり生き続ける思いで

桑永　恵未（兵庫県）

絵本と聞いて、一番に思い浮かべるのは「みにくいあひるの子」である。

幼い頃、私は布団に入る時毎晩のように「この本を読んでほしい」と母に頼んでいた。私にとって、絵よりも文字の方が多い初めての絵本だった。繰り返しこの本を読んでほしいとせがまれる母は少し面倒くさそうだったが、どうしてもそれを読んでもらいたかった。なぜなら、その本は長くて、母が途中で寝てしまうので話の結末がさっぱりわからなかったのだ。

仲間にいじめられて悲しい気持ちになっているあひるの子の哀れな描写のあたりで、母はいつも力尽きて寝てしまうのだった。私は必死で笑いをこらえ寝よ寝よとするのだが、あひるの子の結末が気になって仕方がなかった。そして次の晩に再チャレンジするのだが……。

毎晩読んでもらっても結末に辿り着けず、あひるの子が最後は美しく大きな鳥に成長して幸せになるという事を知ったのは、自分で字が読めるようになってからのことである。最後まで自分でこの絵本を読み切った時は、達成感と前の晩本に大変感動したことを覚えている。今から思えば母には多種多様な絵本を読んでもらった。「スカーリーおじいさんのはたらく人たち」。

絵本は母との濃厚な思い出となって半世紀近く経った今でも私の中に残り続けている。いつも家事で忙しい母が、ゆっくりと自分に向き合ってくれる貴重な時間。それを幼心に大きな喜びとして感じることが出来ていたからこそ、今でもその思い出が私の中にくっきりはっきりと生き続けているのだろう。

（こみなが・えみ）

現代の子育て環境112

わたしの絵本体験記

募集

絵本フォーラムでは、次の原稿を募集しています。

わたしの絵本体験記

子育ての中で体験した絵本のエピソード。読み聞かせや感じたこと、伝えたいこと。

600字程度にまとめて、住所、氏名、職業を明記の上、メールまたは郵送にて編集室までお送りください。（編集の都合上、掲載までに時間がかかる場合がございます。）

絵本フォーラム編集室

絵本講師の発言席

そらいろのたね

服部　勢津子（絵本講師）

私は現在、神戸市認定こども園の保育士をしています。その日々の中での、園児たちとの触れ合いをお伝えしたいと思います。

＊　＊　＊

年度末の終りに、朝顔と風船かずらの種を子どもたちと一緒に園庭や自分用の植木鉢や日除けのプランターに植えています。花の季節が終わると種取りもしますので、年中児や年長児は、同じような黒い小さな種でも「朝顔は真っ黒だけど、風船かずらには白いハートの模様があるんだよね」「茶色くなったら風船かずらの種が入っているんだろうか」と問いかけた。600万粒飛行されて、「いないいないばあ」（童心社）だって、赤ちゃんにとっては新しい絵本ではないのか、日々成長する子どもにとって、昨日読んでもらった絵本も、今日生まれ変わるかもしれない。

＊　＊　＊

研修の感想は、「古くからある本は、退屈だろう」と思ってなるべく新しい本を選んでいた」「棚にある絵本を適当に選んで読んでいた」「子どもの反応がほしくて声色を使っていた」読んだ後、いつも子どもから感想を聞き出していた」「普段のことがとても参考になった」「読きを聞きたい」との感想もいただいた。子どもと接する方たちに、私たちができることが、まだたくさんある。

保育や幼児教育の現場の方たちに、絵本の素晴らしさを読み方選び方が、思いのほか伝わっていない現実を目の当たりにした。現場の大人を、絵本の豊かな世界に引き込んでいく力を、もっともっと、できればたくさんの方に届けたい。

＊　＊　＊

年間出版される絵本は約1000点。その中からいい絵本を選ぶのは至難の業だ。作家や出版社で選ぶ方法もあるが、それよりは、いつものこと子どもに教えてもらいましょうという話をした。

それはもちろん、今、目の前の子どもに聞くということではない。読み継がれた絵本は、これまでの子ども達の、数えきれない「読んで！」「読んで！」の声。その絵本の力と、それを受け止める子どもの力を信じたい。

ライバンにとんどん投げ込んでゆく。こうして、3人3様のおいしいトマトのトウモロコシ料理のできあがり。3人組はみごとに男前になる、というおはなし。

テンポよく歯切れよいテキストにパワフルな絵づくりが目を奪い、ナンセンスなひびきが感じるセンスのよさ。そこで生きぬくことの大切さを語っていないか、尊さを感じさせないか、と。

とてもシンプルで素朴な絵本であるけれど、ゆきつもどりつ読み込むにつれて、ぼくは想う。作者の意図はどうであれ、生きることのすばらしさをこの物語は語っているのではないかと。生き物の生は一回きである。生の誕生は死への旅立ちだ。その旅をどのように生きるか。それぞれが、持てる力の限りをつくして生きぬくことの大切さを語っていないか、尊さを感じさせないか、と。

ぼくは深読みしている。

（おびか・たえす）

"たましい"をゆさぶる子どもの本の世界 115

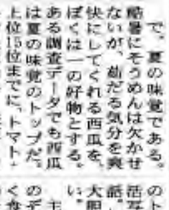
飯肥　毅（批評家・エッセイスト）

長い梅雨寒が去ると打って変わって酷暑の夏である。大型台風までで迫縮する。そんな本題な気候に、ぼくのからだは正直に反応する。酷暑に茹だる。

地球規模の異様な気候変動に直面する世界。1995年、ベルリンで先進諸国は危機を共有して気候変動枠組条約国会議をはじめて開催する。あれから24年経つ。以降、会議は毎年開催されて温室効果ガス抑制の枠組みを策定するが、その実効性に乏しい。大国のエゴがそのまま露呈する。

トウモロコシ3人組のおいしく食べてだから、男前になる!?

「よっ、おとこまえ！」（絵本塾出版）



ヒトのからだがほしがる夏の味覚は野菜果物ばかりなり。なるほど思う。子どもだけならどうなるか、きっとトウモロコシがトップになるのではないかと思う。なにしろ、夏休みの映画館は大きな紙コップを手にした子どもたちでいっぱいで、その中身はポップコーンなのだ。

絵本『よっ、おとこまえ！』は、元気いっぱいで、夏の味覚である。醤油にそうめんは欠かせないが、煮だる匂いを爽快にしてくれる西瓜も、ぼくは一の好物とする。ある調査データでも西瓜は夏の味覚の上位15位までに、トマト、トウモロコシ・枝豆・きゅうり・なす・うなぎ・もも・ゴーヤ・オクラ・みょうが・ぶどう・メロン・ピーマン・あゆがならぶ。なんと魚類2種に肉類なし。面白いではないか。